

# いつきの“ヒューマン・ビーイング”

## 人権について考える ⑰

### ふたつの「まなざし」が 与えてくれた気づき

#### 土肥いつき

京都の公立高校教員。24時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

人権学習では、研修旅行先にかかわるものをテーマとしてとりあげることがあります。今回は、わたしの勤務校の研修旅行の行き先が沖縄になった時にとりくんだ「沖縄人権学習」について書こうと思います。

人権学習づくりは教材探しからはじまります。とりあえず「沖縄 人権 教材」でネット検索をしました。出てくるのは平和学習の教材ばかりです。もちろん平和学習も人権学習ではあります。しかし、わたしが生徒たちに問いかけたかったのは、「ヤマトンチュのウチナンチュへのまなざし」についてでした。

わたしはいつも「なぜこの状況があるんだろう」と考えます。沖縄の場合、「なぜ、今、基地が沖縄に集中しているんだろう」「なぜ沖縄で地上戦があったんだろう」と考えます。多くの平和学習では基地問題や地上戦を扱います。しかし、人権学習で扱わなければならないのは、その背後にある「ヤマトンチュのウチナンチュへのまなざし」なのではないかと考えたのです。しかし、そのまなざしがどのようなものか、わかりませんでした。

人権学習をおこなうのは10月末です。年度当初からどうすればいいか、半年間ひたすら考えました。いろいろな友だちにヒントになる映像があれば、なんでもほしいと頼みました。なんのきっかけもなく途方に暮れていた10月のはじめ、ある友だちが「こんなものがあるよ」と、一枚のDVDを貸してくれました。それは、NHKのETV特集で放映された「深く掘れ己の胸中の泉 沖縄学のまなざし」というものでした。

「深く掘れ己の胸中の泉」は、沖縄学の父と言われる伊波普猷がニーチェの警句「汝の立つ所を深く掘れ、其處処には泉あり」を沖縄語に翻案した琉歌とされています。このようなタイトルを持つこの番組は、沖縄が日本に組み込まれ、日本に同化することを強いられた時代に、沖縄の文化価値を再確認するとともに、自立を模索した「沖縄学」をとりあげたものです。「沖縄学」は、琉球最古の歌謡集「おもろさうし」の解説を中心にした書『古琉球』を出版した伊波普猷によっ

てはじまり、伊波普猷の弟子であるとともに、ひめゆり学徒隊を引率しその史実を訴え続けた仲宗根政善が引き継いでいきます。そして、番組では、形を変えながらも、奪われた言葉や文化をとりもどす営みが現在も続いていることが描かれていました。

このDVDを見た瞬間、自分の中にバラバラに存在していた問題意識がひとつにつながりました。日本が沖縄に対して行っていたことは、朝鮮に対する皇民化政策と同じものだったのです。沖縄に対する「まなざし」は、植民地に対する支配者のそれであると直感しました。それならば、日本が歴史の中で沖縄から言葉や文化を奪った過程と、それに抗して沖縄が文化や言葉をとりもどす営みを伝えればいいと思いました。

そのことに気づいた頃、別の友だちからご当地ヒーローものの「琉神マブヤー」のDVDが送られてきました。その第1話で、悪役ハブデービルは手下のクーパーに次のように言います。「いいか？ ウチナーグチ<sup>(注1)</sup>というのは口でできてると思うか？ 言葉っていうのは心でできているわけよ。だから、ウチナーグチのマブイストーン<sup>(注2)</sup>は言葉を消すために奪ったんじゃない。ウチナンチュの心を消すために奪ったわけよ」。沖縄学の営みは、子ども対象のご当地ヒーローものの中にも息づいていることがわかりました。

そこで、ふたつの番組のエッセンスに加えて、沖縄市・中の町で撮影した中高生のエイサーの練習風景をエンディングにした視聴覚教材をつくりました。そのエンディングには「歴史の中で日本やアメリカに奪われた言葉や文化をとりもどす営みがここにある。私たちが行く沖縄には、こんな歴史があり、今があり、その中でウチナンチュの人々は生きている。そんなことを知って沖縄に行けば、ひとつ深く沖縄を楽しめるのではないだろうか」というテロップを入れました。

人権学習の教材をつくる醍醐味は、あのひらめきの瞬間を味わうことにあると思います。そして、その瞬間を味わったからこそ、子どもたちに「伝える」ことができるのだと思いながら、教材づくりをしています。